町民文芸

只見短歌会　十月詠草

大塚栄一　指導

聞き返す事多くなり補聴器の広告を足の冷ゆるまで見つ　古川　英子

ひと頃は賀状交換せし友の遺影に香焚き別れを惜しむ　吉津　政枝

来し方を孫に重ねて行く道を友と語りぬ古希迎へたり　関谷登美子

施設より帰れば迎へくるるごと鈴虫競ふさまに鳴くなり　五十嵐英子

悪しきことするにあらねど亀虫は臭ひのゆゑに嫌はる哀れ　五十嵐夏美

小豆椀ぐ我が傍らの虫の声短き秋を惜しむがに鳴く　馬場　八智

夫の笠かぶり物干せば硝子戸に映るわが影案山子の如し　齊藤ちひろ

異状気象山に及ぶか紅葉の色の冴えずに秋深みゆく　渡部ゆき子

久々に帰省せる兄に安全と一言添へて漬菜振舞ふ　目黒　富子

川魚の婚姻色に暮れなづむ雲は妊婦のかたち崩えゆく　角田　一男

紅葉と崩れし山の肌色が晴れたる空に映りて侘し　渡部ヨリ子

水害に迂回路松坂峠とふ話聞きしが狭き道なり　新国　洋子

（出　詠　順）

只見俳句会　十一月例会

目黒十一　指導

磐梯を下りて盆地の秋茜　洋子

引く度に香の立ち昇る牛蒡畑　一穂

爽やかや食の進みし朝かな　礼

バスで行く秋の立山雨の中

吹き寄せし落葉新し切通し　邦男

沢石の妙な明るさ冬近し

青空に上がる日の丸運動会　隆堂

父と子の二人三脚運動会

雑木山踏み入りしより秋の声　邦夫

押し出し土石を巡る秋思かな

秋ともし師の添削を読みかえす　リウコ

ゲートボル差し入れのあり茹でっ栗

豪雨受く稲田黄に染み刈期くる　笑羊

残照を百までとして秋彼岸

飯椀にとろろのすべる冬はじめ　修一

石鹸を吊るす蛇口の小六月

石佛の文字にふるる秋の園　康女

コスモスの散るにまかせて暮れにけり　都

里芋や親いもばかり並びおり　敦子

秋うらら泣いてごまかす母のひざ

初雪や水渦の跡の土砂被う　一灯

短日や納屋に納める種袋

女にはする事多し木の実落つ　又壱歩

ゴム長のエナメル光る大根摘み

また来ると去年の日付や備忘板　恒夫

米磨ぐや夕餉の支度時雨降る

目覚むれば七十七の冬来たる　吉児

喜寿のわれよろこぶべきや年忘れ

種茄子の色極まれり天青し

嫁大将と言われし妻の墓囲う

冬の夜や軟膏を貼る母の背（せな）

大根の出来を問いつつ漬ける妻